
麻帆良での日々

暮クレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良での日々

【Nコード】

N0099T

【作者名】

暮クレ

【あらすじ】

前世の記憶を持ち、魔法先生ネギま！の世界へ転生した？主人公。原作知識は皆無で、自分がネギまの世界に転生したとは知らない。ただの逸般人が平々凡々と生きていく物語です。

原作人物は登場しますが、本編にはあまり関わらない予定です。また、筆者に文才は無く、読みづらかったり、変な表現があったりしますが、そこはスルーして頂けると幸いです。

また、原作の雰囲気をぶち壊す事もあるので、読んでいて気に入らなかったり、気分が悪くなったらスグに閲覧を止めてください。

プロローグ（前書き）

はじめまして、暮クレと申すものです。
プロローグなので短めです。
高音さんの口調は難しい。

プロローグ

突然だが、自分には前世の記憶がある。

ハッキリした物ではないが、なんとなく、漠然と感じるのだ。

前世の記憶によると自分は、そこそ良い会社で、まあまあな給料を貰っていた。

21世紀の世界恐慌と呼ばれた時勢にありがたい事である。

仕事にも慣れ、彼女もでき、正に順風満帆。

その自分が、如何して修道服のような格好をして、女の園に居るかという疑問は敢えて無視する。

状況を整理しよう。

自分、もとい私の名前は高崎 慧。

性別は女である、前世は男だが。

季節は春。

ここは、埼玉県の麻帆良学園都市、聖ウルスラ女子高等学校1 - Bのホームルームである。

そして現在、数学の授業中だ。

「じゃあ、次の問題を高崎さん」

「む？」

考え事をしていたら見事に当てられた。
全く聞いていなかった…、どうすんべ。

コンコン

どうしようか考えていると、隣の……

隣の…

隣の金髪さんが教科書の問題を『→ココ』と丸を画いて教えてくれた。

親切な人だ。

問題自体は簡単な方程式だった。

黒板に問題を解いて、先生にマルを貰い、サッサと席に戻る。

それから、授業は恙無く終わり、放課後を迎えた。

「さつきは、ありがとう。助かったよ」

「お礼を言われる程の事ではありませんわ。それより、先生のお話は確りとお聞きなさい」

お礼を言つと、お小言を貰ってしまった。おうふつ。

「それはそうだ。これからは気をつけるよ」

「是非そうして下さい」

どうやら、彼女は真面目気質の人らしい。

「そうだ、私の名前は高崎 慧。外部から入学したから友達が少ないんだ。良ければ友達になつて欲しい」

「私は、高音・D・グッドマン、こちらこそ宜しくお願いしますわ」

ゴッドマン？

なんだか強そうな名前だ…。

指からエネルギー弾を出したり、超音波を出したりするのだろうか？

「良い名前だね」

「ふふ、ありがとうございます」

とりあえず褒めておいた。

その後、彼女と他愛の無い話をしていると下校時刻を告げる放送が流れた。

なので二人で家路に着く。

「高崎さんは、寮に住んでおらっしゃるの？」

「そうだよ。私の実家は静岡だからね、自宅通学はちょっと厳しい」

ちなみにウルスラは、女子中等部と違い全寮制ではない。

自宅から通ったり、一人暮らししている人と半々くらいである。

どうやらゴッドマンさんも寮住まいらしく、話してみると中々話が合う。

自炊が面倒だとか、どこそこのスーパーが安いだとか。

「うちの学校って結構校則緩いよね、ミッション系なのにな」

「確かにそうですけど、だからと言ってそれに甘んじるのは良くありませんわ」

「へえへえ」

「そんな不良みたいな口の利き方、おやめなさい」

暫く歩くと分かれ道。

「それじゃ、私はバイトがあるから」

「あら、そうですか？」

ゴッドマンさんは名残惜しそうだ。

うん、この人は良い人だ。

「ごめんねー。あ、そだ、今度私の部屋に遊びに来なよ。大した持て成しは出来ないけどさ」

「そうですわね、是非伺わせてもらいますわ」

また明日、と手を振って別れた。
彼女とは良い友達になれそうだ。

プロローグ（後書き）

補足説明

・前世の記憶がある
主人公は前世の記憶があると思っている。
だが、それを証明するものは無い。

・世界恐慌
ある国の恐慌が次々に他国へ波及し、世界全体へ影響を及ぼすほどの恐慌のこと。

一般的に1929年、アメリカ・ウォールス街を発端とする恐慌を指す。

21世紀の…と言っている辺り、リーマンショックを発端とする金融危機を言っていると思われる。

・リーマンショック

この出来事は筆者に進学を決意させた。

・隣の…

主人公は人の名前を覚えるのが苦手である。

・金髪さん

本名、高音・D・グッドマン。主人公の友達第1号。

主人公は人の名前を覚えるのが苦手である。
断じてガンオタではない。

・グッドマン

グッドマンを聞き間違えた。

特撮ヒーローではない。

主人公は人の名前を覚えるのが苦手である。

・静岡

アメリカ北西部の田舎町。

しばしばホラーゲームの舞台にされる。

特産品は、お茶、みかん、ガンブラ。

・良い人

主人公にとって、良い人の条件は『友達になれそうな人』『お菓子
をくれる人』である。

・良い友達になれそうだ

主人公は前世の記憶、男口調のせいもあり、同世代の女子と話が合
わない事が多かった。
だから友達が少ない。

断じてオリキャラを書くのが面倒な訳ではない。

第1話 子供先生の必殺技（前書き）

今更ですが、この小説にはオリ設定が含まれます。
かなり時間が飛びます。

ちよつと話が不自然すぎたかな？

*変なところがあつたので改訂。

飛んでるときって認識障害かかってたんですね…。

第1話 子供先生の必殺技

暖かいと思っていた今季の冬も、年を越すと突然その表情を変え、極寒とでも言うような寒さが続いた。

二酸化炭素さんにはもつと頑張つて頂きたい。

人の思いとは無関係に時間は過ぎ去る。

慌しい1月は、あつという間に終り、既に2月も中旬だ。

「なあ、高音さん」

「何かしら」

時刻は12時、私と高音さんは学食で向かい合つて昼食を取っている。

ちなみに私がチキンジャンバラヤで、彼女が力うどんだ。

「今朝から、やたらとチョコレートをプレゼントされるんだが、私はそんなに血糖値が足りないように見えるのか？」

「…あなた、今日が何の日か覚えてないの？」

高音さんは怪訝そうに私を見つめる。

どうやら今日は何か特別な日らしい。

2月14日、煮干の日か？

いや、違う。

チョコレートに関係のある事だ…。

「あ、ヴァレンタインか」

私にとって、あまりに無関係なイベントなので記憶の底から抹消し

ていた。

「貴女は物知りですけど、時偶、すごい非常識ですわね」

高音さんに呆れられてしまった。

ここは話題を変えないと…。

「ところで、話は変わるんだが」

「なんです？」

少々わざとらしいが、話題の転換には成功した。

「最近、女子中等部にどう見ても小学生にしか見えない先生がいるらしい」

「それは私も聞きましたわ。なんでも10歳で既に大学を卒業しているとか」

それは初耳だ。

欧米では飛び級制度もあるし、その子供先生はよほど優秀なのだろう。

だがしかし

「労働基準法って知ってるか？」

「この作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません」

「なるほど」

なら仕方が無い。

「どちらにしろ、私たちにはあまり関係のないことですし、先生方へ迷惑にもなりますから、大げさに騒ぎ立てないようにしませんと

…」

「ねえ、放課後にその子供先生を見に行かない？」

「あなたは私の話聞いてました？」

ギロリ、高音さんに睨まれた。おうふつ。

「聞いてたって。良いじゃない別に、どうせ放課後暇なんですよ？」

「う…、確かにそうですけど」

「じゃ、決定。この決定は覆りませーん」

「ああもう、貴女という人は…」

何だかんだ言って、結局高音さんは付合ってくれる。

「はっはっは、あんまり細かいこと気にしていると将来脱げるぞ？」

「脱げません！」

高音さんは優しいなあ。

と、いうことで放課後。

私と高音さんはいつもの帰路を外れ、麻帆良女子中等部へ向かった。向かうと言っても、同じ女子校エリアにあるので歩いて5分も掛からない。

「子供先生について、いろいろ聞き込んでみたんだが」

「はい？」

「名前はネギ・スプリングフィールド。身長は推定136センチ、髪は赤っぽい茶髪で長髪。出身はイギリスのウェールズ。出張で忙しい高畑先生の代わりに2・Aの担任と英語の授業を受け持っている。性格は温厚で紳土的、歳の割りに大人びているが、やはり歳相応な面もあるらしい。苦手なものは特に無いが、強いて言うならお風呂が嫌いらしい」

1時間にも満たない時間ではこれが限界だった。

「…」

あるえー？

高音さんが無言だ、レスポンス無しですか？

というか、空を見上げている。

高音さんの視線を追う。

「あ」

思わず声を漏らした。

だって、そこには木の棒に跨って、ふよふよと飛んでいる子供が居たからだ。

「おーい」

とりあえず、手を振ってみた。

その子も私たちに気付いたのか、こちらを見た。

「え!？」

視線が合った。

その子はゆつくりと降下し着地する。

そして間髪入れずに、こちらにエライ勢いで駆け寄ってきた。

「あああ、あの、い、今のはですねっ！ぼクの特技というか必殺技であって、決してボクは魔法使いなんかでは無くてですね、あれ？な何で認識障害が、あわわわ」

すごい動揺のしかただ。

「そうか、必殺技か。私はてっきり魔法使いかとおもったよ」

「へ？」

「うん、必殺技なら仕方がない」

大方、必殺技の練習でもしていたのだろう。

確かに自分の技を易々と公開するのは問題がある。

「慧さんはそれで納得しますの？」

「納得も何も、必殺技の練習くらい誰だってする、私だってする」

私も昔は波。拳の練習に勤しんだものだ。

出なかったけど。

「いえ、普通はやらないと思うのですが…」

あれ、そーなの？

「ていうか、君が最近話題のネギ君かな？」

「は、はい、そうですね。僕に何か御用でしょうか？」

口調も丁寧だし、腰も低い。

どうやら、噂通りの良い子らしい。

「いや、特に用事はないんだけど。…ちなみに必殺技の名前は？」

「えー？えーと、ああ、ちょ、超天空×字拳です！」

おお、なんだか喰らったら10日は目覚めなさそうな名前だ。

「はあ、ところで、ネギ先生。先生はお忙しいのでしょうか？」

「あ、はい。そうでした！それでは僕は失礼します！」

そう言っていると、子供先生改め、ネギ先生は脱兎のごとく走り去っていった。

若いって良いね。

「じゃあ、私たちも帰ろっか」

「ええ、そうですね…」

何故か疲れたような高音さんの声が印象的だった。

第1話 子供先生の必殺技（後書き）

補足説明

・二酸化炭素さん

地球温暖化が叫ばれる昨今、最も有名な温室効果ガスが、本当に地球温暖化の原因なのかは不明。

・高音さん

主人公は人の名前を覚えるのが苦手である。

しかし、1年近くも経てば幾らなんでも覚える。

・煮干の日

全国煮干協会が1994年に制定。

ヴァレンタインに被せるとは、どう考えてもネタとしか思えない。

・ヴァレンタイン

バレンタイン。

それは天国であり、地獄でもある。

淡い期待を胸に、いつもより10分早く登校したのは筆者だけではないはず。

・あまりに無関係

主人公は女である。

しかし、前世は男。

つまり、訳わからん。

・この作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません

このテロップが初めて使われたのは「超人バロム・1」である。

・脱げるぞ？

普通なら、禿げるぞ？と言うところだが…。

・脱げません！

果たして…？

・高音さんは優しいなあ

高音さんはネギ先生の正体も、裏の事情もある程度知っている。

彼女は魔法使いだが、一般人の主人公より余程常識人。

きつとツンデレに違いない。

・必殺技

男の子ならだれでも一度は練習した事があるはず。

誰だってそーする。俺だってそーする。

ちなみに主人公は座ったまま2メートルほどジャンプできる。

第2話 バイト、仕事、部活（前書き）

ぶっちゃけますが、暮クレは原作を読んだ事はほとんどありません。Wikipedia様は偉大です。

ちなみに、ウルスラ、と言うより高校生なので寮は一人部屋という設定です。

今回も短い話です、というか長い話は暮クレの技量ではムリ。当初考えていた以上に駄文になってしまいました…。

*ちよこつと高音さんのところと誤字脱字を改訂

第2話 バイト、仕事、部活

私、高崎 慧の朝は早い。

いや、むしろ速い。

朝4時に起き、顔を洗い、歯を磨く。

寝間着からジャージに着替えて出かける。

寮傍の駐輪場へ行き、愛車に跨り発車。

目的地は毎朝新聞販売店、バイトである。

さすがに早朝ということも有って、街に人はいない。

店に着いて、今日の配達分の新聞を受け取ったとき、彼女は来た。

「すみません、遅れました！」

バイトに遅れまいと走ったのだろう、髪はボサボサになっている。

「おはよう、神楽坂さん。今日は一段と婆娑羅ってるね」

「?、おはようございます、慧先輩」

どうやら意味が通じなかったらしい。

「ちょっと待ってね」

「え、うわっ、ちょッ」

私はポケットから櫛を取り出し、神楽坂さんの髪を軽く梳き、ツインテールをキレイに結び直した。

神楽坂さんは少し驚いているようだ。

「うん、キレイになった。やっぱ、美少女は国の宝だ」

「はあ？ありがとうございます」

「おっと、こんな所で話し込んでいたら本当に遅れてしまう」

時計を見ると既に時刻は4時半を過ぎていた。

町内を回るには1時間以上かかる。

二度寝がしたいならそろそろ急がないといけない時間だ。

「ヤバッ、失礼しまっす！」

神楽坂さんは、新聞を受け取るとドップラー効果を残しながら朝靄の中へ消えていった。

「さて、私も仕事しますか」

朝のバイトが終わると寮に戻り、シャワーで汗を流す。

そして、寝る。

これが私の朝だ。

朝、目覚まし時計のベル音で目覚める。

頭が重い。

昨夜は『仕事』があつたので、仕方がないとは思うが、その甘えに浸りたくはない。

身支度を整え、斜向かいの部屋へ。

ここはクラスメイトで友達の慧さんの部屋。

コンコン

軽くノックする。

返事は無い。

「はあ、まったく…」

ドアノブを捻り、無遠慮にドアを開く。

鍵が掛かっていない事は知っている。

無作法極まりないが、もういつものことだ。

部屋に上がり、ベッドを覗くと、幸せそうな顔でスヤスヤと寝息をたてる慧さんがいた。

「起きなさい、遅刻しますよ」

ユサユサ

「うー、へんじがない。ただのたかさきのようだ…」

「バカな事言つてないで早く起きなさい」

軽くデコピン。

ぱちーん。

「んん、お、高音さんじゃないか。おはよう」

「ええ、おはようございます。起きたのなら、早く支度してください。廊下で待ってますから」

そう言つて部屋を出る。

高崎 慧、不思議な人だ。

彼女は、私のような魔法生徒ではなく、ただの一般生徒。

意味のわからない事を口走ったり、何故か認識阻害の魔法を見破ったり、100メートルを10秒で走ったり、座ったまま2メートル近くジャンプしたりしようとも、彼女は一般生徒なのだ。

気や魔法を使っているのではないかと疑ったことも有ったが、その様子は全く無い。

容姿は優れている、頭は悪くない、言動は変だがユーモラス、運動は才能がある。

世が世なら、彼女はあらゆる所で人気者になれただろう。

しかし、ここ麻帆良にいる限り、認識阻害の結界によって普通だと認識される。

それは、彼女にとって良いことなのか？

「ごめーん、道に迷ってたら遅れちゃった」

「いえ、私も考え事をしていましたから…」

私の思いを他所に、彼女はいつも通り意味のわからない事を言いながら部屋から出てきた。

考えるだけ無意味なのかもしれない。

彼女は自ら進んで真帆良にやってきたのだ。

「ん、どうしたの？何か悩んでる？」

「なんでもありません。さ、早く行きましょう、遅れてしまいます」

今は、今の事だけを考えよう。

期末テストが近づき、少し慌しくなったが、学校はいつも通りだ。退屈な授業を終え、放課後。

学校が終わったと言う開放感は何物にも変えがたい。

いつもなら高音さんと家路に着くところだが、今日は違う。なぜなら、部活ミーティングがあるからだ。

集合場所は近所のファミレス。

授業が長引いたせいで出遅れてしまった。

急ぎ足でファミレスへ。

案の定、わたしが着いたところには他のメンバーは既に揃っていた。

「高崎殿、こっちでござる」

呼ばれた方を向くと、年下とは思えないほどグラマラスな中学生、長瀬 楓と、小学生にしか見えない中学生、鳴滝姉妹がいた。

「長瀬さん、ナイスセクシー」

「？ ないすせくしーでござる」

席につく。

隣には長瀬さん。

向かいには鳴滝姉妹。

「あ、けーちゃんだ」

「けーちゃん、お久しぶりですー」

私が来たことに気付いた二人は、手に持ったスプーンを一瞬止め満

面の笑みを浮かべた。

「美味しそうなプリンアラモードだね」

「うむ、やはりプリンは人生に活力を与えてくれるでござる」

双子に言ったつもりだったのだが、良くみると長瀬さんもプリンを食べていた。

「でも全然足りないよ！」

「もつと食べたいですー！」

「無粋な事を申すな。こういった物は、偶に少しだけ食べるから美味しいのでござる」

双子はブーブー言っているが、長瀬さんの言う事は真理だ。

いくら美味しいものでも、毎日食べていたら流石に飽きるだろう。

16×55＝28なのだ。

謳う丘は歌えないのだ。

「そうだね、じゃあ私も贅沢はやめて、一つだけにしよう」

広げていたメニューを閉じ、息を吸う。

「すいませーん。デカプリンΩエンペラーサイズで一つお願いしまーす」

第2話 バイト、仕事、部活（後書き）

補足説明

・むしろ速い

主人公は自転車で平均52km/hで走る。

・愛車

自転車の事。

ジャンク屋で捨値で売られていたルイガノ製のフレームをこれでもかという程値切り、昨今の円高を利用したネット通販とホームセンターを利用して組み上げたクロスバイク。ブレーキはVブレーキ、サスペンションは無し、24段変速ギア。ただ、ほとんど平地な為、フロントインナーはあまり役に立たない。総費用20500円税抜き。次はエビホーンに改造しようと計画している。

・神楽坂さん

バイト仲間。下の名前は知らない。

主人公は人の名前を覚えるのが苦手である。

今後の登場は有るのか？

・婆娑羅

バサラ

ボサボサ↓バサバサ↓婆娑羅

戦国とは関係ない。

・髪を軽く〜した。

この間1・2秒。そりゃ驚く。

・そして寝る

冬場の二度寝は最高だ。

・仕事

結界防衛のこと。

学園にいる一部の魔法生徒はこの仕事に携わっている、と思われる。

・慧さんの部屋

高音さんは部屋に上がり、真っ直ぐベッドに向かい主人公を起こした。

わき目も振らずに……。その理由は後に語られる。

・へんじがない、ただの〴〵のようだ。

某RPGで白骨化した遺体に話しかけると表示される言葉。

このあと、「よくみると」や「そのみぎてには」など続く場合もある。

短い文章の中で、悲壮感や恐怖心を煽る秀逸な文と言える。

・不思議な人

不思議の一言で済むから不思議。

・道に迷ってたら

人生是即ち迷路である。

かの上忍もこの道に迷い、待ち合わせに遅刻した。

・部活ミーティング

と言う名の駄弁りタイム。

・ナースセクシー

すごいよ！！長瀬さん。

・ 16 × 55 〃 28

これを書いている人がいたら、「このド低脳がアーーッ！」と罵ってやりましょう。

喜びます。

・ 謳う丘は歌えない

歌えるやつがいたら是非ニコ動にアップしてくれ。

・ デカプリンΩエンペラーサイズ

4999円税込み。

デカはSI単位接頭語の一つで、10の1乗を意味する。

Ωはギリシヤ文字の24番目、最後の文字。

最後の文字である事から、究極、最終の意味で用いられる。

エンペラーは、キングより上。

でかといってレベルじゃねーぞ！

第3話 加齢なる食卓（前書き）

コミック読みました。

10巻マデダケドナ！。

第3話 加齢なる食卓

麻帆良に住む人々、といか麻帆良学園の生徒は基本的にお祭り好きだ。

火事はないが、喧嘩とお祭りは麻帆良の華とも言える。

そんな麻帆ラーにも、大人しくなる時期がある。

そう、テストだ。

この時ばかりは学園内の空気もピリピリしたものになる。
そして、それはウルスラも例外ではない。

「いやー、頑張るねー」

「なんで、貴女はそう緊張感が無いんですか」

高音さんにジト目で睨まれた、おうふっ。

ちなみに、ここは高音さんの部屋。

テスト直前にテスト勉強中の人の横でマンガ読んでたら、普通怒られるだろう。

「高音さんは真面目だなー」

学校のテストにはコツがある。

教科書を読んで勉強するのも大事だが、それ以上に先生方と仲良くする事が大事だ。

教師というのは真面目な生徒にはべらぼうにスイーツで、質問すると意外とあっさりヒントをくれるのだ。

「く、今回は負けませんからね！」

私と高音さんは毎回テストの点で勝負している。
その方がモチベーションが上がるからという事なのだが…。
今のところ勝負は五分五分だ。

コンコン

ノックの音

「ん、誰か来た。はい」

「ちよつと、何で貴女が答えるの！」

ガチャ

「失礼します。お姉さま、少し良いですか？」

やって来たのは、中等部の佐倉愛衣ちゃんだった。

「愛衣、どうしたの？」

「はい、少し解らないところがあつて…」

申し訳なさそうに言う愛衣ちゃんの腕には、教科書とノートが抱えられていた。

高音さんを見る。

少し困ったような顔だ。

高音さんにも余裕が無いのだろう。

はつきり言つて、高音さんは愛衣ちゃんにべらぼうにスイーツだ。自分に余裕が無くたって、愛衣ちゃんを優先させてしまう。なら、私ができる事は一つしかない。

「私が教えてあげるよ」

「慧先輩、いいんですか？」

「勿論だよ。じゃあ、私の部屋に行こうか」

愛衣ちゃんを連れて部屋を出る。

ドアを閉める直前、高音さんは、軽くペコリと頭を下げた。

愛衣と慧さんが、部屋を出て行って暫く。

私の勉強もやっと一段落ついた。

「ふう」

イスの背もたれに体重をかけ背伸びをすると、疲れていた頭が幾分スッキリした。

前回は、慧さんに僅かながら負けてしまったが、今回はそうはいかない。

そういえば、慧さんの部屋に行ったきり、二人とも戻ってこない。あら？何か大事な事を忘れている気が…

「慧さんの、部屋…？」

ダッ

一目散に慧さんの部屋へ

ダンダンダンッ

「愛衣、いたら返事しなさい！ 愛衣！-！」

慧さんの部屋のドアを殴るようにノックする。
ドアは直ぐに開いた。

「なんだい、いきなり。って、どうしたの、うわあああ of AA みた
いな顔して…」

「愛衣は、愛衣は無事ですか!？」

慧さんの服を掴み、勢い余ってガクガクと揺する。

「うわなにをするやめくあ wse d r f t g y ふじこ 1 p」

「あ、す、すみません」

私は慧さんから手を離す。

冷静になると、少し恥ずかしくなる。

「ふう。高音さんって偶に、とんでもない事やらかすよね。この前
だって…」

「も、もついいでしょ。それより愛衣は!？」

「愛衣ちゃん? いるよ、呼ばうか?」

そう言つと慧さんは振り返って

「メイぢゃーん」

そこで何故お婆ちゃん声にする?

「はい。あれ、お姉さま?」

「愛衣!」

よかった、どうやら何も無かったようだ。

「どうしたんですか、お姉さま？」

「いえ、愛衣がどうしてるか気になって…」

「わあ、ありがとうございます」

「愛衣は大丈夫？何とも無い？」

私がそういうと、愛衣はにっこり笑って

「みんな仲良くしてくれましたから」

「お・・・」

遅かった…。

目の前でOTLな高音さん。

一体どうした？

「ところで高音さん、夕飯食べた？」

「…いえ、まだですが」

それは、都合が良い。

「じゃあ、食べに行かない？ この前、美味しいカレー屋さん見つ

けたんだよね」

「カレー、ですか」

「なんでも、店主が中国に渡って修行した、本格派インドカレーなんだって」

「へえー中国…。あれ？インドカレー？」

愛衣ちゃんが何か言っているが、気にしてはいけない。

「で、どう？」

「…わかりました、行きましょう」

「ほいさ、じゃ、愛衣ちゃんも。今日はお姉さんが奢ったげる」

ということで、一路カレー屋へ向かう事になった。

「
♪」

僕は今、少し上機嫌だ。

たまたま見つけたカレー屋が、最近では一番の大当たりだったからだ。

カレーは良い。

ラーメンの次に良い。

「おや、あそこにいるのは…」

暫く歩くと、見知った人影が見えた。

魔法生徒の高音君に愛衣君、それに一般生徒の高崎 慧君だ。

高崎 慧君。

彼女を一言で言い表すなら、不思議、だ。
編入当初こそ、普通の生徒だと思われていたが、その運動能力は特筆に価する。

それに、彼女の言動は、奇人変人の多いココ麻帆良でも際立っている。

不快と言うわけではなく、ただユニークだ。

高音君の話では、認識阻害の魔法を見破ったらしい。
稀にそういう体質の者はいるのだが…。

「やあ、3人でお出かけかな」

「あ、高畑先生、こんばんわ」

「はい、今から皆でご飯を食べに行くんです」

どうやら、3人で夕飯らしい。

仲が良のは、良い事だ。

「クンクン、クンクン」

「どうしたんだい、慧君？」

なにやら、匂いを嗅いでいるようだ。

「ん、先生。カレー臭がする」

「かッ?!」

加齢集!?

た、確かに僕はエヴァのダイオラマ魔法球の中で修行してたから、
実年齢よりは数年歳を取っているかも知れないけれど、それでも僕

はまだ…

「あ、わかった。先生、夕飯にカレー食べたでしょ」

「ああ、カレー、カレーね」

カレーね、カレーの臭い。

「この先にあるお店なんだけど、結構美味しくてね」

「やっぱりあそこですか。美味しいですよー」

どうやら、僕が気にしすぎていたらしい。

「それでは、先生。私たちはもう行きますね」

「うん、それじゃあ」

他愛の無い会話の後、彼女たちと別れ、その背中を見送った。

「・・・」

カチャ、ピピピ

「あ、もしもし、柿渋石鹸10ダース注文したいんですけど」

第3話 加齢なる食卓（後書き）

補足説明

・麻帆ラー

麻帆良にいる人々、転じて麻帆良学園の生徒のことを指す。
主人公の造語。

・べらぼうにスイーツ

M○Xコーヒー並みに甘い。

・慧さんの、部屋…？

中から偶に、『ピーキー！』という鳴き声（ry
おや、誰か来たようだ。

・うわあああのAAみたいな顔
これはひどい と言う顔。

・うわなにをするやめくあwse drftgyふじこip
この言葉に意味など求めてはいけない。
考えるな、感じる。

・メイぢゃーん
かんだああああ

・みんな仲良くしてくれましたから
みんな…？

・カレー臭

カレーの臭いの事。

加齢集ではない、断じて無い。

・加齢臭

年頃の男には切実な問題。

気にし過ぎなだけ、だよな？

・柿渋石鹸

渋柿に含まれるタンニンには、高い消臭効果と殺菌効果がある。

デリケートな男の悩みも、これで一発解決。

正に魔法の石鹸。

第4話 あなたの人生の物語（前書き）

メタです、注意。

捏造設定注意。

キャラ崩壊注意。

ちよつと書き方変えてみたり。

誤字修正しました。

第4話 あなたの人生の物語

テストが終わると、間もなく春休みに突入する。

その前に、卒業式が催されるのだが、麻帆良学園は内部進学が基本だったりするので、ウルスを卒業した先輩方にも頻繁に遭遇する事になる。

つまり、唯の形式。卒業式は終始和やかなムードで進む。

泣く人は大泣きするし、泣かない人は全く泣かない。

で、これはどこでも同じか。

何が言いたいかというと、今日も平和です、と言うことだ。

Side 高音

卒業式からの帰り道。

慧さんと私は、1年生の代表として卒業式に参加していたのだ。

「ねえ、高音さん」

「何ですか」

「今、突然目の前に、人生に絶望したようなオーラを発している人を見かけたらどうする？」

「はあ、何を突然…」

慧さんが、ちょんちょんと指差した方を見ると、煤けた背中が見え

た。

「あれは、中等部の瀬流彦先生？」

「まるで、リストラされた事を妻に言い出せない夫のような背中だね」

「いえ、流石にそれは言いすぎでは……」

言いえて妙ですけど。

「ちょっと行ってみようか。おい、瀬流彦せんせー」

そう叫ぶと、小走りで走り出す。

「まったく……」

そう呟いて、私は慧さんの後を追うのだった。

Side 慧

「おい、瀬流彦せんせー」

私が駆け寄ると瀬流彦先生はこちらに気づいたようだ。

「君たちは、ウルスラの慧君に、高音君。いったいどうしたんだい？」

「どうした、じゃないですよ。先生こそどうしたんですか、背中が

煤けてますよ」

「ははは、分かるかい？」

乾いた笑みを浮かべる瀬流彦先生。

「実はちよつと悩み事があつてね……」

「悩み、ですか」

呟いたのは、高音さん。

私も頷く。

「それで、悩みというのは？」

「い、いや、態々生徒に聞いて貰うほどのことじゃないんだ」

先生は目をそらし、指をイジイジと弄くる。

相当言いにくい事なのだろうか。

私もどうしようか少し迷う。

悩みの内容は気になるところだが、無理矢理聞きだすのも気が引ける。

どうしようか考えていると、高音さんがズズイッと前に出た。

「先生、私たちはこれでもウルスラで神道を学んでいます。シスター シャークティの様にちゃんとした聖職者ではありませんが、話すだけでも気が楽になる事もあります」

どうか、話していただけませんか？

そう言う高音さんは、まるで本当のシスターのようだ。

高音さんの何事にも全力で取り組むこの姿勢には敵わないなあ、と思う。

私には絶対に出来ないだろう。こういう所は素直に尊敬できる。

「…そうだね。じゃあ、聞いてもらえるかな、僕の悩みを」

瀬流彦先生は静かに語りだした。

私はせめて、私に出来ることをしようと思った。

Side 高音

「じゃあ、聞いてもらえるかな、僕の悩みを」

瀬流彦先生は静かに語り始めた。

少し緊張する。大見得を切ったが、私は所詮二十にも満たない子供であって、先生の悩みを解決できるとは思えない。せめて話を聞くだけでも思ったが、それ程聞き上手な訳でもない。なら、せめて私は全力を尽くすのみだ。

「実は…」

「実は？」

ゴクリ、と唾を飲む。

「一体どうしたら、僕のキャラが立つのか悩んでいたんだ…」

「は？」

キャラ…？

一体、何の話を…？

「先生、分かりますよっ、その気持ち！」

慧さんが食いついた。

「わ、分かってくれるのかい！？」

「勿論ですよ。ちよつと内気な自分を変えたくて、鏡に向かって変なポーズを取ってみたい、無駄にぶるああああとか言ってみたり」

「そうそう、語尾に何かつけてみようと思っても、突然そんな事したら変な目で見られるし。なら、外見にアクセントをつけようと思っても、回りには神多羅木先生にガンドルフィーニ先生、高畑先生と個性的な面々に埋もれてしまう」

「辛いでしょう、考えれば考えるほど、自分にはどうする事も出来ないと感じてしまう。だからと言って他人には相談し難い…」

「そうなんだよ、悩めば悩むほど閉塞感を感じてしまうんだ」

「ええ、分かりますとも」

「・・・」

なんだろう、この状況。
私は完全に蚊帳の外だ。

「ならいつその事、改名してみるとかどうでしょう、先生」

「改名か、確かに神多羅木先生、ガンドルフィーニ先生は、まずその名前にインパクトがある。いい考えかもしれない。具体的にはどんな名前が良いかな」

「例えば、名前に半濁点をつけて、セルピ…」

「ストップ。元ネタは拙い」

「なら名前を短くして、瀬流とか」

「確かに強そうだけど、もうキャラが違ってるよね？」

「ダメですか。じゃあもう谷口とか白石とかで」

「いや、ダメだよ！ていうか、もうって言った？！」

「高音さん、なんかいい名前ない？」

「へ？」

突然話を振られた！？

とりあえず、名前、インパクトのある名前…！

「く、クレメンス・ヴィルヘルム・ヤコブ・メッケルとか」

「・・・」

「・・・」

無言?!

反応なしですか?!

「改名はいい案だと思ったんですけど。諦めざるを得ないようですね。あ、自家製のお米ジュース飲みます?」

「ああ、ありがとう」

慧さんがカバンから取り出して渡したビンからALCOHOLと書いてあったのは気のせいに違いない。

瀬流彦先生は、栓を開けると一気にグビグビと『お米ジュース』を飲み干した。

飲み終えた先生の顔は、明らかに赤かった。

「世間の風はさあ、冷てえよなあ…。どんなに頑張ったって、『お前の影は薄すぎるって』言われるんだから…」

そして突然泣き始めた。

何この状況?

というか、収集つくの、この状況?

私が混乱している中、慧さんは一歩進み出て瀬流彦先生の肩に手を置いた。

「大丈夫ですよ、先生。あなたの様な迷える子羊にぴったりの言葉があるんです」

慧さんは胸の前で両手を祈るように組む。

「主は言いました…」

そして、目を閉じ、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「Don't worry. Be happy」

そう言った、慧さんの顔は満面の笑みだった。

「…なんだか分からないけど、元気が出てきたよ。特に理由もないけど、明日から頑張れる気がする」

「はい、頑張ってください！」

「良く知らないけど、力が湧いてくる。ああ、そうだ！！今ここを生きていけば！！みんな生き生きするぞおっ！！」

そう叫びながら、瀬流彦先生は走り去っていった。スキップで。

「…まあ、元気になったのなら良かった、のでしょうか？」

「そうだね、グダグダ悩んでいるよりは良いと思うよ。それに…」

慧さんは小さくため息をついた。

「途中で面倒くさくなっただし」

「ええ、早く終わって良かったわ」

明日から春休みだ。

第4話 あなたの人生の物語（後書き）

・補足説明

・あなたの人生の物語

テッド・チャン著より

いや、サブタイに特に意味はないですよ？

ただ、色々考えるのが好きな人にこの本はお勧めつてだけで。

・瀬流彦

魔法先生の一人。

初登場は11時間目。

モデルとなったキャラは、ダークファンタジーの巨頭『ベルセルク』の主要キャラクター『セルピコ』

いや、これは絶対に強キャラだろ！

と思っていた時期が筆者にもありました。

・瀬流

セル

ぶるああああ

・谷口とか白石

ああ、あれだ、中の人だよ。

・クレメンス・ヴィルヘルム・ヤコブ・メッケル（1842～1906）

日本帝国陸軍の父、といっても過言ではない人物。

彼の教え子の中には、日露戦争において、当時世界最強を誇っていたロシアのコサック騎兵団を打ち破った秋山好古や、東条英機の父・

東条英教がいる。

また、当時多くの列強国がロシアの勝利を信じる中、彼は日本の勝利を予見していた、らしい。

因みに、坂の上の雲は筆者のお気に入り。

乃木は好きんだけどね。

・お米ジュース

炊いたご飯と砂糖をビンに詰め、水とドライイーストを加え、密封する。

米を使っているが、コウジカビは使っていないため、日本酒ではない。強いて言うなら、お米ワイン。

お酒の密造は犯罪です。

・Don't worry・Be happy・

鏡に向かって、10回この言葉を唱えてみよう。

テストの点とか、出席日数とか、落とした単位の数なんてどうでも良くなってくる

訳無えだろええええええ！！

第5話 麻帆良の日常（前書き）

ええ、パロディです、日常の。
悪く言えばパクリです。

今更だけど、高音さんのしゃべり方ってこんなんで良いのか？

感想でご指摘頂きましたが、まさかのタイトルに誤字。
その修正のために、タイトルが変わりました。

キャラ崩壊注意。

10 / 8 改稿

第5話 麻帆良の日常

Side 慧

春休みに突入して数日。

私は連休特有の気だるい雰囲気の中、雰囲気のままにグダグダ過ごしていた。

「しかし、このままではイカンと思うのですよ」

「はあ？」

高音さんが、『今度は何を考えていやがる？』みたいな視線を送ってくる。

おうふつ。

ちなみに、今は高音さんと愛衣ちゃんと近所の喫茶店で昼食中だ。

「いや、真面目な話、春休みに入ってからグダグダし過ぎかなって」

「確かに、あなたの怠惰っぷりは目に余りますが」

「でしょ」

「威張って言うことじゃありません！」

あはは、怒られた。

私が。

「だからまあ、軽くスポーツでもして汗を流そうっ、て思ったんだ

けど」

「慧さんにしては至極全うな意見ね」

「あー、高音さん酷いー」

私だって偶には真面目な事を言いますよ、と。

「せっかくだから、みんなで楽しくやろって、愛衣ちゃんも」

「わ、私もですか？」

「勿論」

当たり前じゃないか。

「それで、一体何をやるんですか」

「特に決めてないけど、みんなが知っていて2、3人で出来るやつ、かな」

Side 高音

な、何ですか…、この状況。

手を真つ直ぐ伸ばし直立する慧さんと、逆立ちして脚にサッカーボールを挟んだ愛衣が向かい合っている。

どうしてこうなった？

・
・
・

あの昼食のあと、準備をしてから世界樹前広場に集合ということになった。

道具は全て慧さんが用意するとの事で、先に広場に着いた私と愛衣が雑談をしながら慧さんを待っていた。

私たちに遅れること数分、慧さんが何かを抱えてやって来た。

「それはサッカーボールと、碁石？」

「うん」

「ボールは解るのですが、なぜ碁石？」

「なぜってそりゃ、囲碁サッカーだからだよ」

「い、囲碁サッカー？」

「え、知らない？」

「いえ、囲碁もサッカーも知っています。けど、どうしてもその二つが結びつかないので…」

「しまった、まさか高音さんが知らないなんて…。モツヂボールにするべきだったか…」

それも知らないんですけど…。

「まあいいや、取り敢えず私と愛衣ちゃんがやってみるから、それ見て。いくよ、愛衣ちゃん！」

「はい、よろしくおねがいします！」

「め、愛衣?!」

知っているの!?

もしかして、有名なの!?

ゆつくりと歩を進める二人。

その間は僅か2メートル。

二人はゆつくりと向かい合い、互いに構え、そして現在に至る。

理解が追いつかない、二人の構えにも、現在の状況にも。

「くつ、せめてルールブック、いえ入門書か何かがあれば…」

「入門書を見たって分かりやしませんよ」

唐突に後ろから声がした。

振り向くと…

「が、ガンドルフィーニ先生?!」

突然現れたガンドルフィーニ先生。

「言わば両者、初めから禁じ手を使った状態。セオリー無視のハイレベルな攻防だ」

「先生？」

何故突然解説を…

「例えばあの慧くんの真っ直ぐ伸ばした手。あれが囲碁基盤の脚とするならば、対面の愛衣君の構えは、碁石。

一見相性は良さそうに見えるが、愛衣君の却に挟んだボールが曲者…。私の推測だが、この二人…」

ゴクリ、と唾を飲む。

「太陽になろうとしている…！」

「な！？」

何を言っているか、さっぱり分からない…。

「む、動くぞ！」

慧さんに動きがあった。

伸ばした手をゆっくり下げ、ドンっとしこを踏むような構えを取る。

「っ！」

突然慌て、走り出すガンドルフィーニ先生。
そして

「ビーラブド…！」ビシッ

先生までポーズを取る。

「先生、その構えは一体…」

「しっ、静かに。解らないかい高音君、二人に流れるしたり気な空気…。」

下手したらこれ、死人が出るぞ…！」

「ええ！？」

一体、何が起こっているの！？

「こんなハイレベルな試合を見るのは、私も久しぶりだよ。どうりで風が騒ぐ訳だ…」

まだ春先だというのに、ガンドルフィーニ先生の頬を汗が伝う。そのとき、再び慧さんに動きがあった。ゆっくりとポーズを変えていく。

「拙い！この構えは、野良試合であれをやるつもりか！正気の沙汰か！？

…くっ…、しかしこの状況見過ごすわけにはいかない！父上、使わせて頂きます…！」

ガンドルフィーニ先生は両手に基石を構えた。

「全ては『正義』の為に、光差す星とならん！」

そして、走りだす。

「麻帆良流奥義、ガンドル星！！」

そう叫ぶと、ものすごい勢いで宙を舞い、その勢いのまま愛衣と慧さんの下を潜り抜け、世界樹に脳天をぶつけて止まった。

「これぞ、ファイナル ラブド！！」

先生の声が広場に木霊する。

「くっ」

突然、慧さんが体勢を崩し、片ひざをつく。それと同時に逆立ちしていた愛衣も地面に寝転ぶ。

「はあはあはあ、やるねえ、愛衣ちゃん」

「ハアハアハア、慧先輩こそ」

二人は立ち上がり、ガシツと堅い握手をする。その表情はまるで何かを遣り遂げたような、満ち足りたものだった。

Side 慧

「あー、いい汗流した。ガンドルフィーニ先生も審判、ありがとうございます」

「礼を言われるほどの事でもないよ、こんなハイレベルな試合を見ることが出来ただ、寧ろ私がお礼をしたい」

照れくさそうに言う先生。

私は礼をしてから、ベンチで休んでいる愛衣ちゃんと高音さんの所へ。

「いやー、愛衣ちゃんが思った以上に強くてびっくりだよ」

「慧先輩こそお見事です、私感動しました!」

「いやいや、ここまで言われると照れるね。
やっぱりスポーツは良い物だ。」

「ねえ、慧さん」

「何、高音さん?」

「今の試合、どちらが勝ったんですか?」

「へ、さあ?」

勝ち負け有るの、この競技?

第5話 麻帆良の日常（後書き）

書いたは良いが、これ、いいのか？
ダメなら消しますが…。

補足説明

・補足説明

最近、補足説明を書くのが面倒というか、ネタ切れというか…。

・囲碁サッカー

補足説明見たって分かりやしませんよ。

・モチボール

使われるボールは、皮製、布製、五郎の三種類。

五郎は全く弾みません。

プレイ中にお腹が痛くなった人がいたら『ガンバレガンバレ』と声援を送りましょう。

・ガンドルフィーニ

魔法先生の一人。

右手に銃、左手にナイフをもつ事から、近接格闘が得意と考えられる。

また、銃弾を銃弾で打ち落とす等高い射撃スキルも見られる。

こいつ強キャラじゃね？とか思っていたが、酔っ払った所をあつさりやられたり。

強いのか弱いのか良くわからない人。

ただ、囲碁サッカーの実力は強豪ぞろいの麻帆良でも相当なものらしい。

・ビラブド

どうりで風が騒ぐはずだ…。

・正義

日本的に言つと、社会的共通概念に適つた行いの事ではないだろうか。

サンデル氏にでも聞いてくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0099t/>

麻帆良での日々

2011年11月15日01時39分発行